

2026/2/24



バリアフリー演劇公演プロジェクト ミュージカル「星の王子さま」

企画書 (案)Ver. 2



【はじめに】

東京荒川ロータリークラブは人と人とが関わりあうことで生まれる心の豊かさを感じられる場をつくりたいと考え、ロータリークラブの奉仕の理念をもとに誰しもが一人の生ある人間として認められる公平で多様な価値観を認められる社会実現に寄与する為、DEI（多様性、公平性、包括性）の観点から、バリアフリー演劇プロジェクトと冠し公演を企画しました。

2024年5月18日、荒川区とACC公益財団法人荒川区芸術文化振興財団との共催のもと、満を持してバリアフリー演劇プロジェクトを無事実施することができました。ロータリークラブが奉仕活動として本プロジェクトを主催したこと、そしてバリアフリー演劇の公演自体は荒川区では初めての試みとなりました。当日は、750名前後の方々にご来場頂きました。まだ1歳前後の小さな観客から高齢の方、聴覚・視覚障害や重度の障がいを抱えた方々も含め、観客席では多様性を以て思い思いに楽しまれました。

「全ての人を楽しめる演劇の演出に感動しました。公演前に役者さんが舞台の説明をしてくださる演出も初めての体験でした」「伝え合うことの素晴らしさを改めて感じました。これからも伝え合いお互いを理解する姿勢を大切にしていきたい」といった感想を頂いたり、なかでも聴覚障がいの方が息せき切ったように手話を通じてお話され、「こんなことは今まで体験したことがなかった」と喜ばれていたのは印象的でした。

公演後の反響も大きく、「また実施して欲しい」という多くの声に応えるため、引き続き2025年5月24日「Touch~孤独から愛へ」公演としてプロジェクトを企画・実施。**有料制にし「チケットの売り上げを用いて児童養護施設クリスマス・フォレストに、要望のあったパネルミラーを寄贈する」というバリアフリー演劇公演でありつつチャリティー企画となりました。当該施設には3月寄贈予定です。**

「親子や青少年、高齢の方などあらゆる年齢層の方や障がいを伴った方々が一堂に会した中、演劇作品を楽しみながら『観る』ことを通して、コミュニケーションから生まれる新しい物事や価値に気づく契機となる貴重な機会をつくりたい」と当初より考え、企画制作して参りましたが、ご来場頂いた方々への表情の変化や自身以外の客席を通して観劇されたり、私たちにとっても目に見えない豊かさを感じる機会をつくれたのではないかと感じております。

このような機会をつくれたのは一重に、ご協賛頂きました皆様、広告掲載を頂きプロジェクトや若い世代や障がいをもった観客の方々を応援頂きました団体・企業の皆様のお力添えの賜物です。またご共催頂きました荒川区・公益財団法人荒川区芸術文化振興財団のお力によってハンディを抱えた方々の招待も積極的に行うことができ、また広く区内外へと周知をすることができたのは言うまでもありません。ここに深く感謝を申し上げます。

前回もまた「また是非上演してほしい」という数多くの声を頂き、次回も楽しみにされている方々の期待に応える為、次年度もバリアフリー演劇プロジェクトを実施して参る所存でございますので、是非ともお力添えを賜りますよう、何卒宜しく願い申し上げます。

障がいのあるないに関わらず私たち一人一人が人として公平に関わりあえること、認め合えること、それを通じて私たちがいまを生き、次代を担う人たちにとって生きる喜びや、人と人とが関わりあう喜びに出会う場になることを願ってやみません。

1. 実施要項

<演目> バリアフリー演劇プロジェクト

東京演劇集団風 バリアフリー演劇ミュージカル

「星の王子さま」 *Le Petit Prince*[®]

作：サン＝テグジュペリ 構成・演出：浅野佳成 音楽：八幡滋

上演協力：サン＝テグジュペリ財団 翻訳：内藤 濯

<日時> 2026年5月23日（土）14時開演

<時間> 12:45 先行入場／13:00 開場／13:40 舞台説明／14:00～

16:00 公演(休憩含む)／16:00～16:30 バックステージツアー・座談会

<場所> サンパール荒川 大ホール

<入場料> **無料で検討中**（要事前申込・チケット制）

<主催> 東京荒川ロータリークラブ

<共催> 荒川区・ACC 公益財団法人荒川区芸術文化振興財団

<後援>：荒川区教育委員会・社会福祉法人荒川区社会福祉協議会

<協賛・協力> 城北信用金庫・株式会社 ADEKA・東京商工会議所荒川支部・公益社団法人荒川法人会・荒川ライオンズクラブ・荒川西ライオンズクラブ・東京リバーサイドロータリークラブほか

<監修> 大河内直之（東京大学先端科学技術研究センター特任研究員、特定非営利活動法人バリアフリー映画研究会理事長）・廣川麻子（特定非営利法人シアター・アクセシビリティネットワーク（TA-net）、東京大学先端科学技術研究センター熊谷研究室）



2.対象者

- ・ 荒川区の青少年と子を持つ保護者の方々
- ・ さまざまなハンディキャップを抱えるの方々
- ・ 子どもの保育・教育に携わるの方々
- ・ 一般の方々
- ・ 地域を元気にしたいと考えるの方々



3.実施内容

- ・ 東京演劇集団風のバリアフリー演劇「星の王子さま」公演の実施
- ・ 当日は事前の舞台説明やバックステージツアー、俳優たちとの座談会など、舞台に触れることができる時間を用意。
- ・ 参加型で、途中舞台上に出演できる時間あり。



4.ご提案

- ・参加型公演につき、荒川区長滝口学氏（地理学者役）への出演依頼
- ・区立の保育園、あるいは幼稚園、小中学校の子どもたちにステージ上で一緒に歌を歌っていただく
- ・学校単位、園単位で参加してくれる場合、校長先生や園長先生、担任の先生等出演依頼（呑み助役あるいは地理学者）
- ・あらかわ健康アプリ「あらチャレ」の来場者ポイント設定・加算

(ご参考)

文化庁ユニバーサル公演事業
「みんなで楽しむバリアフリー演劇」紹介 Youtube



文化庁「学校のみんなでつくるミュージカル『星の王子さま』」記録映像 Youtube



5.集客や告知について

- ・荒川区内の特別支援学級の生徒さんや障がいのある方々だけでなく、社会福祉協議会を通じてこども食堂の子どもたちを招待するとともに、児童養護施設クリスマス・フォレストの子どもたちを招待
- ・さくら教室方々や社会福祉協議会を関連する障がい者の方々を招待。
- ・チケットは町屋文化センター・サンパール荒川窓口にて申込み・発券
- ・荒川区立小中学校全校生徒にチラシ配布／公共施設・区立小中学校にチラシ・ポスター配布・掲示
- ・西日暮里駅高架下・都電停留場・各町会掲示板にポスター掲示
- ・ほっとタウンや荒川区報に掲載
- ・荒川区の Facebook ページや Instagram、LINE でも周知
- ・事前プレスリリース、取材依頼

【バリアフリー演劇とは】

■ 誰もが鑑賞者となる「バリアフリーな演劇」

演劇に「舞台手話通訳」が登場。舞台上を躍動しながらセリフや音楽を手話で伝え、舞台の背景中央には、セリフや音楽が「字幕」として映し出されます。同時に、登場人物の動きや場面の变化など、舞台の上で起きていることをライブで伝える「音声ガイド」が子供たちを物語世界へ誘います。

■ すべての子供たちは芸術の発信者であり、社会に風を吹かせる存在である

これまで子供たちを前に行った多くの公演を通じて、劇団員一同、そう肌身に感じてきました。

しかし、実際には「周りの人に迷惑をかけてしまうのでは…」「劇場が近くになく、機会がない」「障害を理由に、子供たちに寂しい思いをさせたくない」「盲学校と聾学校の子供たちが一緒に楽しめるものがない」などの理由から、演劇などの舞台鑑賞を諦めてきたと多くの学校の先生方から伺ってきたのも事実です。

そんな先生たちの声に応え、一人でも多くの子供たちに「本物の劇場体験」を届けた。既存の舞台芸術が持っていた「枠組み・壁」を取り払い、障害のある子もない子も、一緒に演劇を楽しんでほしい。そして、違いを持った人同士が違いをそのままに、この社会で共に生きていくことの面白さと喜びを知ってほしい。そんな想いで、先生方のご意見を伺いながら、バリアフリーな劇場を創り出します。好きな時に拍手をしたり、声をあげたり、舞台に駆け上がったたりも自由です。その1つ1つが、彼らが鑑賞している証拠であり、演劇の世界に浸ることで生まれてくるその子なりの表現だと考えています。知的好奇心や表現が引き出され、ひとりひとりの表現が重なり合う場は、自身や友だち・先生や家族と新たに出会い直す場にもなるはずです。みんなで作り出す演劇空間に生まれる「小さな共生社会」が、子供たちが担うであろう未来の社会の種になること、それが「バリアフリー演劇」を通じて私たちの目指すものです。



【バリアフリー演劇の上演について】

目が見えない人たちや、耳が聞こえない人たちも、みんなで一緒に舞台を楽しめるように、様々な鑑賞サポートを取り入れた演劇の事を「バリアフリー演劇」と呼んでいます。台詞の字幕表示や、音声ガイドを追加したり、更にはシナリオや演出にも工夫を加えていこうという新しい試みです。

①上演前の舞台説明

劇団員が、鑑賞サポートの内容や舞台装置、登場人物の役柄が衣装などを紹介します。

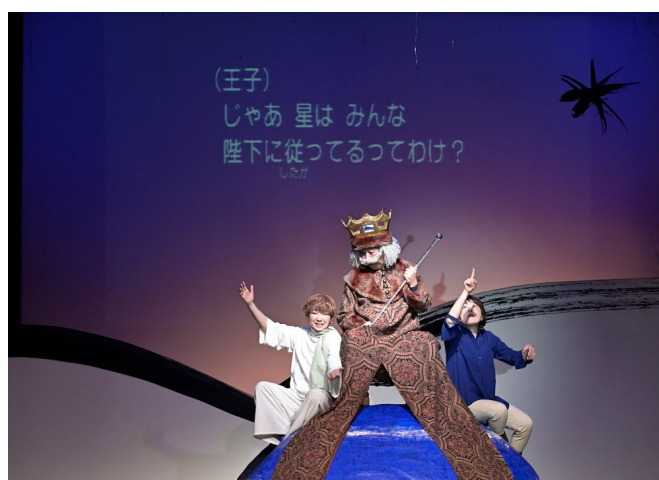


②舞台上での手話通訳

舞台手話通訳者が登場し、物語の進行に合わせて、手話でストーリーを表現します。芝居に溶け込むような通訳にも注目ください！

③バリアフリー字幕・音声ガイド

セリフなど音の情報を字幕で表示し、俳優の動き、表情などを客席に流れる音声ガイドで解説します。聴覚障がいのある方には、上演台本の事前貸出も実施しています。



【東京演劇集団風（とうきょうえんげきしゅうだんかぜ）】

「今、なぜ演劇なのか、この時代、この社会において演劇の為すべきことは何であるか」という問いとともに1987年に創立。1999年、東京・東中野に専属の拠点劇場「レパトリーシアター-KAZE」設立以降は、年間6～8本のレパトリー作品と新作を上演。青少年を対象とした全国巡回活動も意欲的に行う。さまざまな個性を持つ子どもたちと一緒に演劇を楽しむ方法を10年ほど試行錯誤した経験をもとに、バリアフリー演劇を開発。初演は2019年の「ヘレン・ケラー」で、その後2作品を開発・上演している。レパトリーシアター-KAZEでの公演、機関誌の発行など多面的に創造活動を行っている。



作品について

「星の王子さま」が書かれたのは、1943年。「第二次世界大戦」という悲惨な戦争の渦が、世界中の人々を苦しめていたときです。作者であるサン・テグジュペリは飛行機乗りであり、当時世界中を空の上から見つめながら様々なことを感じていたと思います。大自然に生きる動物や雄大な景色、完全な暗闇に光る一点の星の明かりが命をつなぐ存在だったり、人間たちがお互いに憎しみあい、傷つけ合う悲惨な現実もいやというほど見てきたことでしょう。そのような時代で作者は、親友のため、又世界中で苦しんでいる人、あとから生まれてくる人達にメッセージを送ってくれたのだと思います。「光と陰」の世界に生きるすべての人達にとって、「星の王子さま」は人間社会の厳しい現実や、はかなさを痛感すると同時に、夢と希望を持ち続けながら人々がふれ合うことの大切さを意識させてくれます。

東京演劇集団風の「星の王子さま」は、およそ2,000ステージの上演を重ねてきました。劇団創立以来最多の公演を行っている「星の王子さま」は、劇団にとって特別な作品です。フランスのガリマール社の方々や、サン・テグジュペリの遺族の方、それに学校公演で出会った先生方や生徒たちと共に試行錯誤を重ねながら、「今のとき」にわたしたちが何をすべきかを考え、王子さまの世界を創り続けています。

文化庁主催の「本物の舞台芸術体験事業」で行っている上演では、小・中学校の生徒たちが芝居に参加し、全校生徒と王子さまたちが作品を創ります。児童や生徒たちの王子を励まそうとする純粋な歌声やセリフは、私たちにも大きな勇気と感動をあたえてくれます。王子の世界の中には、キツネが王子におしえる「大切なことは、目にみえないんだ」というセリフのように、考えさせられることが、多くちりばめられています。世界中の「星の王子さま」にふれるひとたちにとって、人間が生きていくときに、何が大切なのかをこの作品が気づかせてくれると信じて、東京演劇集団風は、「星の王子さま」の上演を創り続けていきたいと考えています。

【キャスト】

白根有子・渋谷愛・工藤順子・緒方一則・栗山友彦・佐藤勇太・賀来俊一郎
舞台手話通訳／小島祐美 音声ガイド／辻由美子

【スタッフ】

作／サン＝テグジュペリ 翻訳／内藤 濯 構成・演出／浅野 佳成
バリアフリー演劇監修 大河内直之、廣川麻子

音楽／八幡 滋 照明／坂野 貢也
音響／酒見 篤志 舞台監督／佐田 剛久



【ロータリーについて】

ロータリーは、世界の人道的課題に取り組む、ボランティアリーダーの世界的ネットワークです。ロータリーには200以上の国・地域に46,000以上のクラブがあり、全世界の会員数は約140万人に上ります。ロータリーの会員は、地元での社会奉仕活動から、ポリオ（脊髄性小児まひ）根絶活動のような世界的取り組みに至るまで、地域レベルと国際レベルの両方で人びとの生活を向上させています。1905年にシカゴで創設されたロータリーでは、110年以上、さまざまな職業をもつ人や市民のリーダーが「世界を変える行動人」となり、その経験と知識を生かして社会奉仕活動や人道的活動に取り組んできました。識字率向上、平和構築、水と衛生の改善など、幅広い分野で持続可能な影響をもたらすために、ロータリーの会員は毎日、世界のどこかで活動しています。

ロータリークラブには、世界で、地域社会で、そして自分自身の中で持続可能な変化を生み出したいと願う多世代の人たちが集まっています。世界中のロータリーとローターアクトの会員は、人助けのために行動する仲間や地域の人たちとのつながりを深めながら、大都市から小さな村にいたるまで、それぞれの地域社会に変化をもたらしています。

わが国最初のロータリークラブは、1920(大正9)年10月20日に創立された東京ロータリークラブで、翌1921年4月1日に、世界で855番目のクラブとして、国際ロータリーに加盟が承認されました。日本でのロータリークラブ設立については、ポール・ハリスの片腕としてロータリーの組織をつくり、海外拡大に情熱的に取り組んだ初代事務総長チェスリー・ペリーと、創立の準備に奔走した米山梅吉、福島喜三次などの先達の功を忘れることができません。

その後、日本のロータリーは、第2次世界大戦の波に洗われて、1940年に国際ロータリーから脱退します。戦後1949年3月になって、再び復帰加盟しますが、この時、復帰に尽力してくれたのが国際ロータリーの第3代事務総長ジョージ・ミーンズでした。その後の日本におけるロータリーの拡大発展は目覚ましいものがあります。ロータリー財団への貢献も抜群で、今や国際ロータリーにおける日本の地位は不動のものになりました。



ロータリーの使命

ロータリーの使命は、職業人と地域社会のリーダーのネットワークを通じて、人びとに奉仕し、高潔さを奨励し、世界理解、親善、平和を推進することです。

ロータリーのビジョン声明

私たちは、世界で、地域社会で、そして自分自身の中で、持続可能な良い変化を生むために、人びとが手を取り合って行動する世界を目指しています。

世界各地のロータリー会員は、平和の推進、疾病予防と治療、安全な水と衛生設備の提供、教育の支援、母子の健康、地域経済の発展、環境の保護などを通じて人びとを支援し、地域社会に持続可能な変化をもたらすために活動しています。ロータリーはまた、世界からポリオ（脊髄性小児まひ）を根絶することを最優先の活動としています。1985年にポリオ予防接種プログラム「ポリオプラス」を開始したロータリーは、1988年に世界保健機関（WHO）やUNICEF（国連児童基金）などと共に「世界ポリオ根絶推進活動（GPEI）」の主要パートナーとなりました。



【これまでのバリアフリー演劇プロジェクトの様子】



